

月夜とめがね

小川未明

目ざまし時計の音が、カタ、コト、カタ、コト  
とたなの上できざんでいる音がするばかりで、あ  
たりはしんとしずまっています。ときどき町の  
人通りのたくさんな、にぎやかな巷ちまたの方から、  
なにか物売りの声や、また、汽車の行く音のよう  
な、かすかなとどろきがきこえてくるばかりであ  
ります。

おばあさんは、いま自分はどこにどうしている  
のかすら、思いだせないように、ぼんやりとして、

ゆめをみるようにおだやかな気持きもちですわっていました。

このとき、外の戸をコト、コトたたく音がしました。おばあさんは、だいぶ遠くなった耳を、その音のする方にかたむけました。いまじぶん、だれもたずねてくるはずがないからです。きつとこれは、風の音だろうと思いました。風は、こうして、あてもなく野原や、町を通るのであります。すると、こんどは、すぐ窓の下に、小さな足音がしました。おばあさんは、いつもにせず、それをききつけました。

「おばあさん、おばあさん。」と、だれかよぶので

あります。

おばあさんは、さいしょは、自分の耳のせいではないかと思いました。そして、手を動かすのをやめていました。

「おばあさん、窓をあけてください。」と、また、だれかいました。

おばあさんは、だれが、そういうのだろうと思  
って、立って、窓の戸をあけました。外は、青白  
い月の光が、あたりをひるまのように、明るく照  
らしているのであります。

まどの下には、背せのあまり高くない男が立って、  
上をむいていました。男は、黒いめがねをかけて、

ひげがありました。

「私はおまえさんを知らないが、だれですか。」と、

おばあさんはいいました。

おばあさんは、見知らない男の顔を見て、この人はどこか家をまちがえてたずねてきたのではな  
いかと思いました。

「私は、めがね売りです。いろいろなめがねをた  
くさん持っています。この町へは、はじめてです  
が、じつにきもち気持ちのいいきれいな町です。今夜は月  
がいいから、「こうして売って歩くのです。」と、そ  
の男はいいました。

おばあさんは、目がかすんで、よく針のめどに、

糸が通らないで「まっっていたやさきでありましたから、

「私の目にあうような、よく見えるめがねはありませんか。」と、おばあさんはたずねました。

男は手にぶらさげていた箱のふたをひらきました。そして、その中から、おばあさんにむくよくなめがねをよっていました。やがて、一つのべっこうぶちの大きなめがねを取り出して、これを、窓から顔を出したおばあさんの手にわたしました。

「これなら、なんでもよく見える」とうけあいです。」と、男はいいました。

窓の下の男が立っている足もとの地面には、白や、赤や、青や、いろいろの草花が、月の光をうけてくるずに咲いて、におっていました。

おばあさんは、このめがねをかけてみました。

そして、あちらの目ざまし時計の数字や、こよみ暦の字などを読んでみましたが、一字、一字がはつき

りとわかるのでした。それは、ちょうど、いく十年前の娘のじぶんには、おそらく、こんなになんでも、はっきりと目にうつったのであろうと、おばあさんに思われたほどです。

おばあさんは、大よろこびでありました。

「あ、これをおくれ。」といって、さっそく、おば

あさんは、このめがねを買いました。

おばあさんが、お金をわたすと、黒いめがねをかけた、ひげのあるめがね売りの男は、たち去ってしまいました。男のすがたが見えなくなつたときには、草花だけが、やはりもとのように、夜の空気の中におっていました。

★テキストは、インターネット上の「青空文庫」のテキストをもとにしています（一部加工しています）。